『サムライ　浮世絵師になる　鳥文斎栄之』展関連ボランティア企画

# 江戸の美、栄之の世界をみよう

## 将軍の絵の具方から浮世絵師になる　　８階

### №２　狩野栄川院典信《田沼意次領内遠望図》

―大物政治家？　品格ただよう雅な男性が遠くを眺めている。
　なんとこの人物は［田沼意次］。遠くの景色は彼の領地、現在の静岡県牧之原市であろうかやな。
災害はむごい。天明３年(1783 年)浅間山大爆発による［天明の大飢饉］による餓死から国を救うべく、松平定信が台頭。田沼意次、老中失脚。浅間山の大噴火が起きなければ、「賄賂の帝王」と今日まで言われ続ける事なく、「江戸文化や経済を発展させた名君」と言われてたかもしれない。鳥文斎栄之の師匠、典信の田沼意次への忠誠心が描かせた江戸絵画か。（M.Sa）

## 華々しいデビュー　隅田川の絵師誕生　　８階

### №１９　鳥文斎栄之《吉野丸船遊び》

―大型新人誕生
栄之の錦絵が確認されてから１－２年後の豪華大判五枚続きの錦絵。駆け出しの浮世絵師としては異例の華々しいデビューです。
生涯隅田川を描き続けた栄之らしい船遊び図。当時の屋形船で最も大きかったとされる吉野丸では宴たけなわ。春駒を舞う芸者やお囃子方だけでなく本来男性客と思しき人々も皆女性で描かれた美人画仕立て。小舟の猿回しも見目麗しい若衆姿です。寛政期の作品に比べるとややふっくらとした頬や後姿の女性像に清長の影響やモチーフの借用が見られます。
背景には同じように船遊びを楽しむ屋形船や屋根船も。猪牙舟や筏流し等働く人々も描かれ、江戸の人々にとって隅田川が主要な交通路であり、生活の場であったことが伺えます。
大胆な船の構図と着物柄など細部まで細やかに描かれ、狩野派で学んだ技量の高さが見られます。（S.N）

## 歌麿に拮抗－もう一人の青楼画家　　８階

### №４７　鳥文斎栄之

《「青楼芸者撰　いつ花　おはね　おふく　いつとみ」》　　後期

―あなたは誰推し？？
いづれあやめかかきつばた…3 人の美女が決めポーズで描かれています。
当時人気のアイドルのようなものなのでしょうか。
流麗な立ち姿、凛とした表情、涼やかなお目元・・・ほぅ～と思わずため息がでてしまいます。お着物の柄や合わせもそれぞれとても素敵。鼓や三味線が足元に描かれ、美しさには外面だけでなく内面や立ち居振る舞いも大事よね！と、自分磨き頑張ろうと決意も新たになりました。
ちなみに私の推しはおふくさん！グレーのお着物に華やかな帯のあわせ、クールビューティーな雰囲気、憧れちゃいます！（M.Su）

## 色彩の雅―紅嫌い　　８階

### №５６　鳥文斎栄之　《「風流七小町　あふむ」》　前期

―江戸の渋好みここに極まり
サムライ絵師の栄之は艶やかな朱色を抑えた「紅嫌い」という手法で、平安時代前期に活躍した歌人小野小町七伝説のひとつをこの作品に取り上げました。若かりし頃はその才能に加え世間を騒がせるほどの美貌を誇った小町も、齢百歳を迎えるころになるとさすがに老婆となります。当時の陽成天皇はその姿を憐れみ御歌を送りその返歌を求めます。ところが小町は天皇の御歌の最後の部分「玉だれの奥やゆかしき」のうち「奥や」の「や」を「ぞ」に置き換え、すっかりそのままを返します。つまり一字の違いで「玉だれの奥（宮中）を覗いてみませんか」の問いを「覗いてみたいものですよ」との意味に変換したのです。そしてこれは和歌の手法のひとつ「あうむ（オウム）返し」であると付け加えます。和歌の名手は外観こそ衰えても歌の才と機知は健在だったということです。恋愛遍歴が多く華やかで色鮮やかな小町の人生を、あえて紅色を使わず黒や灰色で表現したのは、栄之一流の通好みな手法だったのかも知れません。（S.A）

## 栄之ならではの世界　　８階

### №７３　鳥文斎栄之《「風俗略六芸　茶湯」》

―閑座聴松風（かんざして　しょうふうをきく）
梅香る立春の候、炉点前、振袖とお揃いの紫色の袱紗で、桐花紋平棗を白く美しい手で上流お嬢様が拭いている。今日の茶会では、紫色の帛紗は男物が多く、女性が紫色の帛紗でお点前している場面に私は出会った事がない。江戸時代、武家の茶道によっては紫帛紗を女性も使っていたのかもと、この上品な浮世絵に私は目が釘付けになった。
お茶をたてる際、袱紗は特別な布。私は small silk cloth FUKUSA と茶室で通訳している。茶室で使われる茶器に埃はついていない。この場面では、帛紗は茶器を浄める為に使われている。なので wiping の後に to purify(=清める)と言う言葉を付け加えて翻訳したほうが、茶器が置かれた茶室の空気が伝わると思う。
「茶の湯のお点前に、プロテスタントの礼拝ではなく、カトリックのミサの影響がありますね。なぜなら、両方とも浄めの作法だから。」と初来日のドイツ人に言われた事があった。ある家元が同じ事を新聞で述べておられた。
慌ただしい日々、時には心静かに一服のお茶を楽しみたいものです。（M.Sa）

## 門人たちの活躍　８階

### №１１１　鳥園斎栄深《鷹匠》　後期

―粋な鷹匠
江戸時代は泰平の時代でしたが、軍事訓練と娯楽を兼ねて、生類憐みの令を出した綱吉以外の各将軍は鷹狩を楽しんでいました。この鷹を扱う鷹匠には精悍な男性のイメージを抱きます。しかし、ここに描かれているのはなんと麗しき美青年！これも美人画の一様式でしょうか。
着物の柄には富士と茄子が描かれていることから鷹とあわせ、初夢尽くし。するとこの美青年の鷹匠も夢？
全体を押さえた色彩による紅嫌いで描きつつも、人物の唇と鷹を繋いだ紐が赤く彩色され、アクセントとなり動きを醸し出しつつ新年を寿ぐ雰囲気が漂います。
作者は栄の字を持つ栄之の門人あるいは栄川院の門人とも目されています。
（S.N）

## 栄之をめぐる文化人　　８階

### №１３４・１３５　鳥文斎栄之/大田南畝讃　《大田南畝像》

―横顔
天明期、狂詩・狂歌・戯作などで活躍した四方赤良こと大田南畝は栄之と同じ幕臣（御家人・徒組出身）で膨大な数の書物を記録したことで知られます。
多様な人材との交友関係がつくられ、狂歌仲間以外にも山東京伝や上田秋成をはじめ、谷文晁、歌舞伎役者の初代中村芝翫や七代目市川團十郎。そして葛飾北斎や栄之等浮世絵師達。特に栄之とは親しく栄之画：南畝讃の作品も多く残っています。
寛政の改革を機に狂歌の世界から遠ざかり官吏として活躍した南畝が仕官５０年を記念して描かれた肖像画には南畝自身が讃を入れています。
珍しい横向きの図からは猫背であごの出た南畝の特徴と人柄もあらわされているようです。（S.N）

## 美の極み―肉筆浮世絵　　７階

### №１４７　鳥文斎栄之　《遊女と禿図》

―江戸の教養、分かるかな？
ここに描かれているのは遊女とそのお世話をする「禿（かむろ）」と呼ばれる少女。彼女も行く行くは遊女に昇格する予定だが、それはさて置き、この遊女の方の着物を見てほしい。十二単を着た女性とその足元に猫が座っている絵柄が見て取れる。現代人の私たちは「平安時代も猫をペットにしていたのね」と微笑ましい感想を持つかもしれない。しかし、江戸時代の教養のある人たちは「ははーん、これは源氏物語の女三宮だ」と勘づくだろう。そうするとこれはもう微笑ましい絵柄ではなく不倫とその後の悲劇を予感させるものになってしまうのだ。女三宮は光源氏の二度目の正妻だったが、40 才の光源氏には幼すぎる 14 才。若いうえにけっこうな美貌の持ち主。それ故に柏木という若い男の目を引いてしまう。そのきっかけとなったのが猫なのだ。宮中で蹴鞠遊びをしていた柏木たちの前に女三宮の飼い猫が飛び出して来た。その瞬間、閉ざされていた御簾が持ち上がり、彼女はその美しい姿を皆の前にさらすことに。女三宮の美しさに夢中になった柏木は、ある日彼女の寝所に忍び込み、思いを遂げてしまう。結果、女三宮は不義の子を産んでしまうのだ。これを悲劇とみるかロマンチックと捉えるかはその人次第だが、江戸時代の人たちはひとつの絵柄から広がるストーリーを思い描き、存分に楽しんで浮世絵を鑑賞したことだろう。（S.A）